

レト・ロマンスの概念の再検討 - フリウリ語の *sedon / cucjarin* のケースを例に  
Riesame del concetto di "retoromanzo" - nel caso di *sedon / cucjarin*

山本 真司  
YAMAMOTO Shinji

0. はじめに

フリウリ語は、ある特定の的方法論の立場からすれば、レト・ロマンス（あるいはラディン）語 [1] の一種と分類される。この分類方法は、多くのロマンス言語学のマニュアルにも登場し、その科学的価値はともかく、一種の常識のようになってしまった。そのためであろうか、フリウリ語の特徴を記述する際にも、レト・ロマンス一般の特徴と関連づけながら論を進める方法が、今日に至るまでごく普通に行なわれて来た。

レト＝ロマンスという概念は、少なくともその出発点においては系統論的であり、同じ特徴を持つものは同じ起源に遡る、という考え方に基づく。これが、比較言語学的発想の強い影響のもとで、歴史的・通時論的な研究から生まれてきたものであり、そうした方法論的制約のもとにあることは、すでにしばしば指摘されてきた。

加えて、言語の通時論的变化に対する認識が深まり、比較言語学が提示しているのはさまざまな言語変化のパターンの1つに過ぎない、ということがますますはっきりしてきた今日、歴史的研究の観点としても、レト＝ロマンスという枠組みを設定することが果たして有用なものでありうるのか、という反省が当然なされるべきであろう。

筆者は、機会あるごとに「レト・ロマンスという観点からは、フリウリ語の姿は十分には捉えられない」と主張している。本稿は、そのような主張を、具体的な実例をとおして検証していくための、試みの1つである。

具体的には、「さじ・スプーン」を意味するフリウリ語の語彙を取り上げ、レト＝ロマンスという立場からの分析と、フリウリ語の状況そのものに基づいた観点からの考察とを比較し、両者のあいだにどのような見通しの差が出て来るかを見てみたいと思う。

1. \* *skeitho* について

フリウリ語をレト＝ロマンス一般についての概観の中に位置づけながら概観した記事は多くあるが、本稿では、考察の糸口として、Rohlf's 1972 を取り上げたいと思う。この論文が他と比べて特に異なっているから、というわけではない [2]。たまたま、そこに取り上げられているある語が、本稿の筆者の注意を引いたからである。

フリウリ語 *sedon* は、「さじ・スプーン」を意味する単語である。この語は、Rohlf's 1972 によれば、ゲルマン語 [おそらくゴート語] の \* *skeitho* (北欧語 *skeidh* [3] に基づいて再構されたもの) に由来するとされている。そして、この \* *skeitho* に由来する語は、グラウビュンデンの *sdun*、ドロミテの *sciadun*、などのように、レト・ロマンス地域の他の幾つかの場所にも見出されると言う。

Rohlf's は、\* *skeitho* の系統の諸形とイタリアの *cucchiaio* とを対比させ、前者がいわゆるレト＝ロマンスの3つのグループ (グラウビュンデン、ドロミテ、フリウリ) のいずれにも存在していることは、レト・ロマンス諸語の古い統一性を反映し、イタリア語の状況と明確な対照を示すと考えている。

もっとも、かかる主張は、なにも Rohlf's に限ったことではなく、イタリア語 (またイタリア系諸方言) に存在せず、レト＝ロマンス地域に存在する語彙の存在を、レト＝ロマンス諸語の統一性や (イタリア系諸方言に対する) 独自性の証拠とする論法はよくなされるものである。

ところで、ここでドロミテの言わは代表として引用されている *sciadun* は、ガルデーナ方言の語 (普通、辞書には *sciadon* の形で載っている) である。実は、「さじ」を表わす語彙に関しては、ドロミテ・ラディンの

状況はおよそ均質的・等質的とは言い難い。ごく大雑把に見ただけでも、バディエ方言 *cazú*、フォドム方言 *cazuol*、アンベッツォ方言 *cazol*、ファッサ方言 *sculger* (南部)、*scuier* (北部)、カドーレ方言 *skulié* (Auronzo di Cadore)、*skolé* (Campolongo di Cadore)、コモリコ方言 *skulé* そして ベルルーノ県域のあちこちに見られる *kučaro*, *kučarin* [4] など、複数の系統が混在していることがわかる。これらの語彙を見ると、ガルデーナ方言の形は、ドロミテの中ではむしろ孤立している、とさえ言えなくもない。

このようなドロミテの状況を知らずに Rohlf's の記述を読む人は、そこで選ばれている *sciadun* がドロミテの典型的な言語状況を表わしていると思ってしまうかもしれない。もちろん、Rohlf's が展開しているのは系統論であり、系統論は言語の保守的な部分に方法論的に依存していることを考慮に入れば、ここで *sciadun* を持ち出してきたことも間違いとは言えないであろう。逆に言えば、同じ状況を対象にしても、問題意識が異なれば、資料の選択の仕方も分析のしかたも、これほどまでに異なり得るといことなのである。

これに比べて、フリウリ語地域は、言語的には、ドロミテ・ラディンのそれとは比べものにならないほどに均質的であることはよく知られている。それでも、語彙の上に現われるような方言差は決して稀ではないのだが、「さじ、スプーン」については、フリウリ語圏の全域に渡って *sedon* の系統の語が用いられているようだ [5]。そういう意味では、*sedon* は、フリウリ語の代表的なものと言って間違いのないであろう。

\* *skeitho* がたどった運命は、フリウリとドロミテではこれだけ異なるのである。レト＝ロマンスの「統一性」を「再構」という観点からは、このような違いは、いかに大きいものとは言え二次的なものに過ぎない。しかし、このような違いこそがその言語が辿って来た歴史を反映しているものであり、フリウリ語が、また、ドロミテ・ラディンの歴史を知るためには無視できない事なのである。

## 2. *cucjarin* と *sedon* (*ute*) について

*sedon* にくらべるとあまり目立たない存在だが、実は、フリウリ語では、「さじ、スプーン」を表わすのに、もう1つ別の系統の語が存在する。それは、*cucjarin* という語である。

この語は、さじはさじでも、特に「小さじ、(コーヒーや紅茶を飲むのに使う)スプーン」を指す。この語は、ヴェネト方言の語 *cuciarin* からの借用語である。*cuciarin* は、「さじ、スプーン」という一般的な意味の語である、*cuciaro* (あるいは語末母音が脱落した *cuciar* という形で現われる方言もある) に縮小辞 *-in* が付いたもの。*cuciaro* はラテン語の \* *COCHLEARIU* から来ており、イタリア共通語の *cucchiaio* もこれに由来するものである。

イタリア語でも、コーヒーや紅茶を飲むのに使う小さじ・スプーンが、*cucchiaino* (*cucchiaio* に縮小辞 *-ino* をつけてつくられた変異名詞) と呼ばれるから、ヴェネト方言の *cuciarin* とイタリア語の *cucchiaino* は、形の上でも、また、意味の上でも、並行した状況を示していることになる。

ちなみに、フリウリ語では、子音結合 *CHL-* (*CL-*) は保存されるので、この *CHL-* が *kj-* となるのは、フリウリ語本来の音変化ではない。*CL-* がいわゆる口蓋化を起こして *kj-* となる (ヴェネト方言の場合にはさらに進んで *c-* の段階に至る) のは、いわゆるイタリア系諸方言を、レト・ロマンスから区別する重要な特徴の1つとされている。この点も、*cucjarin* が紛れもなくイタリア系方言からの借用語であることの証拠である。

「(コーヒー用の) 小さじ」を表わす語に関しては、フリウリ全体に渡る統一性は見当たらず、言語地図をひもとくと、さまざまな形が見出だされる。しかし、大きく分けると、だいたい、*cucjarin* およびそれに類する諸形 (*cucarin*, *gucarin*, etc.) と、前章で取り上げた *sedon* に縮小辞 *-ute* [6] がついた *sedonute* およびそれに類する諸形 (*sedonute*, *sidonute*, *sidonuta* etc.)、の2系統に分けられるようである [7]。

実は筆者は、フリウリで *cucjarin* という語を使う話者と *sedonute* を使う話者との間の板挟みになって困った経験があり (どちらの側も自分のフリウリ語には自信があり、筆者にもぜひとも「正しいフリウリ語」を身に

付けるようにと、熱心に勧めてくれたわけである)、それがきっかけで、「スプーン」を表わす語についてちょっとした聞き取り調査をしようと思いついたことがある。

その中で出て来た証言の中で、興味深いのは、30歳代のある男性が、なぜ自分がコーヒースプーンのことを *sedonute* ではなく *cucjarin* と呼ぶのかを、次のように説明してくれたことである：「*sedonute* という言葉を聞くと、いなかの家で使っていた、木で作ったさじのことを思い浮かべてしまう」と。つまり、この人にとっては、現在使われているような、金属（今日では時には合成樹脂）のスプーンは *cucjarin* であり、かつて農村の世界で使われていたのが *sedonute* なのである。ここでは、*sedonute* と *cucjarin* が、それぞれ固有の意味を獲得して、意味上の分化、役割分担が成立している。

この点をさらに別のフリウリ人何人かに聞いてみたところでは、*sedonute* という語について、このような印象を抱いているフリウリ人はこの男性だけではないようである。つまり、これは、単にある個人の体験という以上の広がりを持っている現象と考えられる。

このような意味の区別は、*cucjarin* という語が、都市の富裕階級の生活習慣と関連があるのではないかと、思われる。コーヒーを飲むという習慣自体、かつては一部の特権階級のものであったのである。フリウリが長い間ヴェネチア共和国の支配下であり、ヴェネト方言の使用が上流階級に広まっていたことを考えると、コーヒーのスプーンが、フリウリ語系の *sedonute* ではなく、ヴェネト系の *cucjarin* で呼ばれるようになって不思議ではない。つまり、*cucjarin* は、*sedonute* の属する世界にはなかった文化・生活体験を言い表わすためにフリウリ語に取り入れられたのではないかと考えられる。もっとも、これを例証するには、民族学・社会学の観点からも実証的な研究が必要であろう。

外来語の定着が意味の区分と結び付くという現象は、言語接触の際にはいつでも起こる可能性があることであって、別に目新しいことではない。そもそも、日本語に「さじ」と「スプーン」という2つの語が並存していること自体、そのよい例であろう。

### 3. *cucjarin* からフリウリ語を見ると

筆者は、*sedon* と *cucjarin* に関するこのエピソードを、フリウリ文献学会の会合で報告したのだが [8]、その時には、あくまでも借用語の問題としてこの話題を取り上げたのであった。では、レト＝ロマンスの問題については、ここからどのような事を引き出すことができるであろうか。

先に、我々は Rohlfs において、\* *skeitho* をよりレト＝ロマンスに特徴的な語彙ととらえて、これを「イタリア的」な \* *COCHLEARIU* に対比させる考え方を見た。この考え方に従い、フリウリ語をレト・ロマンスという観点から捉え、レト・ロマンスの特徴がより典型的に保たれている所にフリウリ語の特徴を見ようとするならば、*sedonute* と *cucjarin* のうち、よりフリウリ語らしいのは *sedonute* のほうであり、*cucjarin* のほうは、外から入ってきた異質な要素、ということになりかねない。

*sedon* が、(レト・ロマンスだけの、とは言えないにしても)レト・ロマンスの古い層に属し、その古い特徴を保存しているものである、という視点は、ある意味では正しく、科学的に一定の価値を持つものではあろう。

しかし、*sedon* が、新しく入ってきた *cucjarin* との関係で、言語構造の中で新しい位置づけを得るという課程を観察していると、そこには、まさに「生きている」言語の姿、新しい現実と直面して常に自分の姿を変えていく言語の姿がある。

基本的にはロマンス語としての性格を保ちつつも、フリウリ語は、ヨーロッパの3大言語グループ - ゲルマン、スラブ、ロマンス - の接点にあり、古くから続くさまざまな言語と接触しその影響を受けてきた経歴を持つ。語彙にもそれらの痕跡は見い出せる。ケルト語、ラテン語、ギリシャ語、ゴート語、ロンゴバルド語、スロヴェニア語、中高ドイツ語、ヴェネト方言、イタリア共通語など、おびただしい数の言語がフリウリ語の語彙に

ながしかのものを残してきた。

そのような点から言うと、sedon と並んで、cucjarin が場所を得た、という事実こそが、まさにフリウリ語の歴史を特徴づけてきた、絶え間ない言語接触を象徴する、まさに典型的な実例とは言えないであろうか。これは、cucjarin を視野からはずしてしまっただけで浮かび上がってこない側面である。

そして、ひとたびレト＝ロマンスという枠組みから自由になって見直してみると、sedon も、そういった絶え間ない言語接触と変化の歴史のひとこまを我々に伝える刻印に他ならないことに気がつくであろう。

#### 4. まとめ

レト＝ロマンスというのは、数多くの言語・方言を、幾つかの共通の特徴を頼りにひとまとめにした分類したものである。そこでは、レト・ロマンス諸語の多様性、個々の言語・方言ごと細かい事情は、(共通の特徴と考えられる部分を浮き彫りにするための、方法論上の便宜として) 切り捨てられていることは、言わば当然なのである。

しかし、逆に考えてみると、こうして切り捨てられた諸要素は、(レト＝ロマンス諸語すべてに共通の要素ではないが故に) 個々の言語の固有の事情と結び付いている。したがって、ある意味で当該の言語の特徴・歴史をよく表わしている可能性があるわけである

本稿では、sedon と cucjarin の2つの語について、この「切り捨てられた要素」がどのようなものであるかを、ほんの少しのぞいて見たに過ぎない。しかし、この切り捨てられた諸要素は、そのまま捨て置くにはあまりにも重要ではないか、と筆者には思えるのである。「レト・ロマンスという観点からは、フリウリ語の姿は十分には捉えられない」と主張するゆえんである。

#### 注

本稿は、1994年5月22日における、日本ロマンス語学会の発表「フリウリ語の特徴」に加筆・修正をほどこしたものである。

本文中における諸語の表記については、もし既にある程度確立された書記法がある言語の場合にはそれにしたがった。また、辞書などからの引用においては、原典における表記をそのままに残した。その多くは、基本的にイタリア語の正書法に小さな修正をほどこしたものである。

[1] 本稿では、ラディンをレト＝ロマンスの同義語とする。

[2] むしろ、この Rohlfs の論文が、従来から流布しているような、レト＝ロマンスに対する先入観に相変わらず影響されていることに、失望の色を隠さなかった研究者もいる。Benincà 1973 を参照。

[3] アイスランド語の正書法では、dh のかわりに、いわゆる "crossed d" を用いて、skeið と書くようである。

[4] kučaro の系統の語は、多くの場合、skulié, skulé の系統の語と並存しているか、それにしだいに取って代わりつつあるようである。

[5] ASLEF の 2708 番の項 "cucchiaio per mangiare la minestra" を参照した。

[6] -ute は、厳密に言うと、女性名詞に付く縮小辞である。

[7] これについては、ASLEF の 2710 "cucchiaino (da caffè)" を参照した。

[8] この報告の記録は、Ellero 1992 に記録されている。

## 参考文献

- Alton, J. B., *L ladin dla Val Badia*, Brixen, 1968
- Benincà, Paola, *Osservazioni sull' «unità lessicale ladina»*, in *Studi linguistici friulani* III, SFF, Udine 1973, pp. 121-132
- Croatto, Enzo, coordinato da, *Vocabolario ampezzano*, Regole d'Ampezzo, Cortina d'Ampezzo, 1986
- Dell'Antonio, Giuseppe, *Vocabolario ladino Moenese-italiano*, a cura del Grop de Moena dell'Union di Ladins di Fassa e Moena, s.d., s.l.
- De Lugan, Ida Zandegiacomo, *Dizionario del dialetto di Auronzo del Cadore*, Istituto Bellunese di Ricerche Sociali e Culturali, Belluno 1988
- De Lorenzo Tobolo, Elia, *Dizionario del dialetto ladino di Comelico Superiore*, Tamari Editori, Bologna 1977
- De Zolt, Germano, *Dizionario del Dialetto Ladino di Campolongo di Cadore e Omaggio a Geremia Grandellis*, Istituto Bellunese di Ricerche Sociali e Culturali, Belluno 1986
- Ellero, Gianfranco, *La Frae di Marian*, in *Sot la Nape* Jugn-Setembar 1992 n.3 pp.85-87
- Faggìn, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine 1985
- Frau, Giovanni, *Individualità linguistica del Friulano*, Institut di studis furlans, 1989 Udin
- Martini, Sergio Giuseppe, *Vocabolario Gardenese-italiano*, Firenze, 1953
- Mazzel, Massimiliano, *Dizionario ladino Fassano (cazét)~italiano*, Istituto culturale ladino, Vigo di Fassa, 1976
- Pellegrini, Adalberto, *Vocabolario todom-talian-tòdasc*, Manfrini Editori, Calliano 1985
- Pizzinini, Antone, *Parores ladines, Vokabulare badiot-tudèsk*, Innsbruck, 1966
- Pizzinini, Franzl, *Sfòl de parores ladines*, a inJunta dla gramatica "Ladin dla Val Badia", in *Rezia* 1976-77
- Rossi, Giovanni Battista, *Vocabolario dei dialetti ladini e ladino-veneti dell'Agordino*, Istituto Bellunese di Ricerche Sociali e Culturali, Belluno 1992
- Velleman, A., *Dicziunari scurznieu da la Lingua Ladina*, Samedan, Engadin Press 1929
- Rosmarie Mussner/Elisabeth Ties/Lois Craffonara/Luciana Detomas/Fabio Chichetti, *Diziunar Ladin Dolomitan. Mi prim dizioner / M' pròm dizionar / Nie prum dizionar de Richard Scarry*, Institut Cultural Ladin "Micura de Rù"- San Martin de Tor, Institut Cultural ladin "Majon di Fascegn" Vich de Fascia, 1.ediziun 1987
- Pirona, Giulio Andrea / Carletti, Ercole / Corgnali, Giovan Battista, *Nuovo Pirona. Vocabolario della lingua friulana*, ristampa anastatica, SFF, Udine 1983.
- AA. VV., *Atlante Storico Linguistico Etnografico Friulano*, SFF, Udine 1967-1986